

写真の人類学のために
～第三世界の家族写真研究に関する覚書～

A Note on the Anthropological Study of Family Photographs

坂元一光
Ikko Sakamoto

はじめに

人類学のS. H. ポターは北タイ農村のある一家族を中心とした民族誌をあらわし、北タイ社会における母系原理とそれが現実の社会的コンテクストのなかで見せる多様な展開のあり方を示そうと試みた(Potter 1977)。彼女は、従来の民族誌にあるような文化項目ごとの叙述ではなく、家族員ひとりひとりの日常生活や内面を丹念かつ平明な語り口で記述してゆく手法を採りながら、周辺の自然や住環境なども含め、登場人物たちの生活の具体層を生き生きと描いている。そのひとつに家庭内に飾られた写真についての記述があり、高床式の家屋内部の生活空間とその利用の様子の一例として居間に飾られた家族写真が紹介されている (*Ibid.* 32-34)。居間の壁とそこに据えられたガラスケース内に所狭しと並べられた写真群は、われわれ日本人の感覚には馴染みのない風景として印象深いものがある。

むろん、居間などに家族や親族の写真を飾る習慣は、タイの家庭に限ったことではなく、ある程度の写真文化が浸透した他のアジア、アフリカ諸社会から欧米社会まで世界中の家庭に広く見られる現象であろう。ただ、このような家庭内に飾られた家族の写真は、これまで限られた客や親族に対して束の間話題を提供することはあったけれども、社会や文化の研究者にとっての研究資料として直接に利用されることはあまりなかったように思われる。しかし、この家族写真には、その家族に関するさまざまな物語りや記憶が視覚情報として濃密に封じ込められている。なぜなら、写真をはじめとする近代的映像メディアの第一の特性は、対象の正確な複製であり、そこに信頼性の高いひとつの記録手段としての効用が期待されるからである。家族写真への社会的アプローチを試みたボーダムとマルティネスも、家族写真(アルバム)を「書かれた日記や家族の年代記の現代的形態」として捉えている(Boerdam and Martinius 1980-95)。

写真あるいは写真实践を対象にしたこのような視点は、社会学にとどまらず文化人類学の領域にも多くの新しい知見を提供し得るように思われる。実際に、日本の家族研究における写真資料の利用に関しては佐藤(1989)が着目し、人類学では真鍋(1990)が韓国の巫神図(神々の肖像画)をひとつの家族写真のメタファーとして捉えることで、神々のコスモロジーへの接近の可能性を示唆している。また、哲学をはじめ幅広い創作活動でも知られるアメリカのスー

ザン・ソントグはその『写真論』のなかで写真に現実を超えた実像を認め、単なる現実の複製あるいは「影」（プラトン）としての従来までの写真観を打ち砕いた（ソントグ 1992）。写真のなかにこそ真の現実を見いだそうとするソントグの主張は、少なくとも写真をもって現実世界の把握を試みようとする立場の者すべてに対して、さらなる可能性を示唆している。小論は、ひとつのアジアの家族写真の事例に触発されながら、人々の生活のなかに急速に浸透しつつある写真文化とその研究対象としての可能性について、人類学的な視点からの若干の展望を試みるものである。

1. 映像による文化の記録および分析

写真に限らず、人々の内面世界や特定の時代・社会の価値観を探るための手段として様々な絵画や図象を用いる方法は、これまでも人類学、社会学、歴史学等の分野で積極的に採用されてきた。例えば、フランスのアナール学派の歴史家フィリップ・アリエスは、従来の文書資料ばかりではなく、絵画や肖像画などの視覚的な資料を意欲的に用いることにより、中世から近代に至る家族や子供の概念における大きな心性的断層をあざやかに提示することに成功した。アリエスは図象的資料を積極的に用いることによって、文字表現や文書資料だけでは捉えることのできない家族や子供に関する庶民たちの歴史心性を、より効果的に抽出することに成功した。

また、同じくフランスの社会学者ピエール・ブルデューも、すでに1960年代の初頭から、その研究グループとともに、フランス人の写真活動をテーマにした調査研究を進めつつあった（ブルデュー 1990）。その中でブルデューは、特に、写真における家族的機能すなわち「家族集団がその集団自身や集団の統一性などに関して抱いている感情を再確認することで、その集団の統合・一体化を強化する機能」（同書、P24）を強調し、写真を用いた家族社会学研究にひとつの展望を開いた。アリエスの場合は、視覚的資料を記録された過去の証拠として用いたのに対し、ブルデューはこれを社会的規範の分析手段として用いたといえる。

文化人類学研究における写真あるいは映像資料の利用も、基本的に大きく二つの方向性が考えられるようである。ひとつは記録を目的とする利用であり、もうひとつはこれを文化分析のための手段として用いる方向である。前者では、主として民族誌の補助的資料として、あるいは失われつつある民族文化の記録・保存の手段としての利用がその中心となる。人類学における初期の映像利用の目的は、まず民族文化における視覚的記録及び文字資料（民族誌）の補足的側面に向けられていた。この点に関しては、大森の映像人類学についての概説の中に詳細で通史的な報告を見ることができる（大森、1982）。大森によれば同じ民族誌映画でも、撮影機材の進歩や制作理念の多様性（例えば、記録を重視するか作品としての構成を重視するか等）などの問題もあり、その内容はそれほど単純ではない。しかし、失われつつある文化を映像のかたちで記録・保存し後代の文化研究に供するという大枠の目的では共通するものがある。

これに対して、映像を用いる主眼を文化の分析に置く立場がある。すなわち調査地で撮影された映像を文化の分析のための手段として用いる方法である。例えば、文化人類学ばかりでなく精神医学や動物学の領域でも顕著な業績を残したグレゴリー・ベイトソンは、文化分析の手段として初めて本格的に映像資料を用いた人類学者であった。ベイトソンはバリ島人の文化の性格を捉えるために、母と子のさまざまな相互行為を写真に収め、これを主たる分析の手段として用いた。このベイトソンの仕事は、文化分析に直接写真を利用した先駆的試みとして現在

でも高い評価を得ている。このように、人類学における映像資料の利用は、大きく記録と分析という二つの方向性のなかで捉えることができるように思われる。

2. 家族と写真文化

壁面に展示される写真において、質量ともにその中心を占めると予想されるのが、家庭の家族員を対象とした写真である。ブルデューはフランス人の写真実践に関する社会学的考察のなかで、写真における「家庭生活の重要な瞬間を荘厳に祝い、不朽のものにする」いわゆる「家族的機能」を強調した。かれは、結婚や子供の誕生といった人生の契機と写真実践への欲求との密接な関連を示しながら、その中で写真が果たす「家族集団の連続性と統合化」の機能を明かにしようとしたのである。

しかし、現代社会における家族の様相は、このデュルケーム的な社会機能論がそのまま通用するほど牧歌的状况にとどまっているとは思えない。現実には、日本社会や欧米社会においては「性・愛」をめぐる価値の多様化と混乱が家族の変容や「ゆらぎ」をもたらし、これに関わる研究者にも深刻なテーマをつきつけている。その意味においてブルデューの「写真の家族的機能」論は、このような家族の結び付き方の変容を前にして、時代的にも興味深い検討の段階をむかえているといえよう。

また、このような写真と家族との結び付きはなにも、写真機が一般家庭にまで普及した先進国に限定されるものではなく、小論が想定している第三世界における家族写真にも当てはまるものである。第三世界の場合、一般に庶民層における写真撮影の習慣の普及と現像過程の利便性および低廉性が十分に実現されていない状態にあると考えられ、その写真文化はいわゆる欧米先進諸国に比して、いく分過渡的状况を呈していると予想される。しかし一方で、19世紀に始まった人類の写真実践は、今や先進国のみならず、第三世界にも着実に浸透しつつあることもまた事実である。写真機自体の普及はそれほどでなくても、写真そのものは人びとの家庭に、あるいは個人の財産目録のなかに着実に蓄積されつつあるとあってよいだろう。北タイの一農村における居間の写真の例は、その辺りの事情をよく物語っている。

また、家庭内の写真を分析するに際して、こうした萌芽的な写真文化の形態は、むしろ格好の研究機会を提供しているともいえる。例えば、ソンググはポーズを取らない不意の写真（スナップ写真）を拒絶する1970年代半ばの中国の写真受容の形態を紹介しながら、これをカメラ文化の最初の段階として位置づけた。そして、中国人にとっては写真を撮ることはいつでも儀式なのであり、その背景に中国人の行為と肖像の礼節に関する古い習慣があることを指摘している（ソンググ 前掲書 PP173-174）。写真をめぐる欧米的な価値観によって侵蝕されていない社会においては、写真の受容に対するその文化に特有の反応のあり方を、より直接的に析出することが可能かもしれないのである。

さらに、過渡的な写真文化の状況は、必然的に、各家庭の所持する写真の量（枚数）を限定する。特に家庭の壁面に飾られた写真を対象とする場合、こうした要因は調査する側にとっての対象の把握をより容易なものにする。限定された枚数の写真は、それらを各家庭の壁面に一度に展示することを可能にし、写真というひとつのイメージ（被写体像）を介して再編された家族の物語りの全体を、分析者の前に一挙に提示してくれるからである。それは、その家族の構成員およびその先祖によって紡ぎ出されたエピソード（事件）を中心とする家族の年代記であり家族の物語というテーマの「組み写真」である。家族やそれを取り巻く価値観の変容ある

いは民族ごとのその多様な展開は、はたして家族写真のあり方にも反映するのか、反映するとすればどのような形をとるのか、第三世界における家族写真の研究は多くの課題を残していると思われる。

3. テキストとしての壁面写真

小論の出発点となった壁面等に飾られた家族写真には、どのような資料的価値が予想されるのか、また、それを写真から読み取るためにはどのような手続きが必要となるのだろうか。先にポターの民族誌のなかで紹介された居間の写真は、いうまでもなく、単なる部屋の装飾品としての役割以上の意味を備えている。飾るということ、あるいはこれを第三者の視線を前提とする居間に置くということは、それが家族や来客に見てもらうことを前提とした写真であることを意味している。すなわち、それは見せるために展示された写真であり、その前に立つものに対してある読み取りをせまる一種の映像テキストとして存在しているのである。

テキストとしてのこの家族写真には日常的な時間と空間を超越するもうひとつの小宇宙が開示されている。写真は居間にあって日常的に眺められる対象でありながら、そこに写されたイメージは、実は、全く別の世界に属している。居間の壁面に飾られた写真群は一種の非日常的な空間を形成しているのである。フランス文学の篠田は『形象と文明』において先史時代の壁画から現代の写真や映画まで、人類のあらゆる形象化の営為をひとつの壮大なエクリチュールの歴史として俯瞰しようとした(篠田 1977)。その中で篠田はR. バルトの言を引用して、写真の内在的特質を「こことかつてという非論理的な結合」の結果生まれた「空間—時間のひとつの新しいカテゴリー」であり、そこに写真の写実的な映像特性が交錯して現出する「非現実的現実性」の世界であると紹介している(同書 PP342-329)。すでにこの世にはいない死者の姿や王族あるいは過去の出来事のように、「いま・ここ」にあるべきでない人物や場面が現前するもの、このような写真の内在的特性によるものである。

一方、ブルデューは一般庶民の写真を、撮影される対象や契機についてのある種の選択を経た結果として捉える。彼によれば撮られた写真あるいは飾られた写真の中のイメージは、「撮られるべき」対象や契機として「選択」され、日常世界の文脈のなかからある意図にもとづいて切りとられたものなのである。記号論的な見方でいえば、印画紙の上にイメージとして切り出された現実の断片は、それがかつてあったコンテクストとしての現実との対比において特別の意味を獲得する。対象や契機を選択にもとづいた一連の写真行為を介して、普段の現実と印画紙のなかのもうひとつの現実の断片との間に対比的関係すなわち意味が生成されるのである。これは、例えば、一般庶民による日常の写真活動に注目することで容易に理解できる。彼らの写真活動は、主として子供の成長過程や年中行事のような、日常性の中に立ちあらわれた特別な場面(シーン)を中心に展開する。それは日常の流れの中であってある聖別された非日常的時間・空間を占めており、写真機によって「撮られるべき」対象や契機として特別の意味が付与される。さらに、写真という現実の薄片に特別な意味を付与するということは、ソクタグにいわせれば現実を「再定義」することであり、さらにはその「支配」にさえもつながる(ソクタグ 前掲書 PP158-159)。写真は撮られるべくして撮られるのであり、ただ漫然と撮られるものではない。一般庶民の写真の多くは、日常的な生活から識別された特別の対象と契機を記録したひとつの記念碑としてあるのである。

また、各家庭において保存されたり展示されたりする写真には、さらにもうひとつの選択が

はたらく。すなわち、壁面への配置を含む広義の編集作業がそれである。大なり小なり空間的な制限を受けるために、人々は自分たちの写真を、例えばテーマごとに選別したり、あるいは壁面上での構成を考えたりする。この過程においても「残されるべき写真」、「飾られるべき写真」とそうでない写真が、あるいは「中央に配置されるべき写真」、「上部に配置されるべき写真」とそうでない写真が分類される場合がある。そして、この広義の編集過程によって、例えば「組み写真」のテーマのように対象となった写真群全体をめぐるさらなる意味の生成がもたらされる。編集というもうひとつの意志的過程が介在することによって、これらの写真には写された被写体のイメージそのものの内容（意味）以外に、新たにもうひとつの意味（メタ・メッセージ）が付与される。このように、一連の編集作業を経た写真群の読み取りに際しては、上記の二つの次元での意味体系の存在を考慮した解釈が要求されることになる。

実際、家庭に展示された写真群を読み取ってゆくについては、いくつかの手順と分析枠組を準備する必要がある。少なくとも、前述したように二重の意味の体系として壁面写真をとらえようとする立場から(1)写真に定着されたイメージ（被写体）そのものの内容の分析と(2)それらの写真の壁面構成と秩序の分析とを平行して行うことが必要である。そして、最終的には両体系を総合的に解釈することによって、その全体としての文化的意味がはじめて明らかになる。

(1)については以下の諸点に着目した分類が考えられる。まず、撮られている対象に関して

イ、特定の人物（たち）を中心としている場合

1. 特定個人
2. 特定集団
3. その他（神像、王室等）

ロ、人物以外を中心的な対象としている場合

1. 行事（時間）
2. 風景（空間）
3. その他

ハ、撮られ方の状況

1. スナップ写真
2. ポーズ写真

イ及びロは選択された被写体の内容による一般的整理である。また、ハは先述したように写真文化の受容形態について、何らかの情報をもたらすかもしれない。

以上はきわめて形式的で暫定的な分類であり、現実にはある特定の風景や行事を背景にした人物写真や集合写真などが想定される。そこで、イ、ロ、ハ、はさまざまな組み合わせによって捉えることが必要になるだろう。また、(2)の写真全体の配置や構成に関しては、(1)の内容分析を前提に作業が進められる。すなわち、壁面という限られた展示スペースの中に上記の(1)で分類された写真がどのような配置をされるのか、例えば、その配置の仕方のなかになんらかのパターン（規則性）や秩序があるのか、あるいはそうした規則性のようなものは全く存在していないのか。もし、ある秩序をもって配置がなされるとすれば、その背景にはやはり何らかの思

想あるいは社会・文化的意味が伏在することが予想される。(1)によって与えられる被写体の「選択」の契機と(2)の全体的な構成とを総合的に読み解くことによって、人々の写真活動をめぐるひとつの世界観への接近が可能になると思われるのである。

おわりに

以上、家族写真を中心に、主としてその資料価値的側面とそれへのアプローチの仕方及び若干の将来的な展望を見てきた。前述した手順にそって「撮られるべき」対象や契機を分析するという試みは、我々の前に撮影時の家族とその生活をめぐる思考や心性のあり方についての新しい情報をもたらす可能性を十分に秘めている。また、特に第三世界における写真文化の研究に関しては、その過渡的あるいは初期的な浸透状況に注目することによって、まず、これまで取り上げられることのなかった文化変容の研究課題として、写真文化の受容の過程をリアルタイムで追跡できると思われる。さらに、家族写真をはじめとする写真文化が浸透する初期の段階においては、家族写真や写真そのものに対する人々の反応の過敏さや純粋さ故に、おのおのの民族におけるひとつの文化的な傾向性や態度がより容易に把握しうるように思われる。

家族写真は年代記的過去を我々の前にひろげて見せるだけではない。ソクタグの指摘にあったように、それは「過去の薄片」を扱いながら、実は家族の現在あるいは未来へ向けられた意志をも表明している。家族写真は単に家族の過去の物語りをなぞるだけでなく、ある理想や未来へ向けてその現実を「再定義」し「支配」しようとする道具でもあるのだ。

写真という人類の新しい文化要素は、家族という太古からの制度を短期間のうちに取り込みながら、今や地球的な規模で拡散しつつある。家族研究において写真資料のもつ重要性に関する認識も深まってよい時期であると考えられる。

(注、小論はあらかじめ北タイの家庭写真の事例研究として準備されていたが、調査日程等の都合から、現地の資料を盛り込んだ具体的な検討を試みることができなかった。今回は、家族写真の人類学的利用とその具体的な資料検討に向けての見通しをつづった、いわば「青写真」の段階にとどまっていることをお断りしておく。)

参考文献

- Boerdam, J. and Martinius, W. O.
1980 Family Photographs-A Sociological Approach-The Netherlands Journal of Sociology, Vol 11(95-119)
- ブルデュー, P (山縣 熙 他訳)
1990 『写真論—その社会的効用—』法政大学出版局
- 真鍋祐子
1990 「巫神図—神々の家族写真—」『比較民俗研究』2号
- 宮坂敬造
1985 「ベイトソン—精神の生態学にむけての人類学的足跡—」『文化人類学群像』2

写真の人類学のために

アカデミア出版

1985 「民族誌のアヴァンギャルド, 一人類学者バイトソンのモノグラフと理論」
『現代思想』1984年5月号、Vol. 12-5、青土社、130-149頁

大森康宏

1982 「映像人類学」『現代の文化人類学-2-』(祖父江孝男 編)
現代のエスプリ別冊 至文堂

Potter, S. H.

1977 Family Life in a Northern Thai Village, University of California Press

佐藤友光子

1989 「家族写真と家族研究—写真資料の有用性と問題点についての考察—」『社会学年誌』30、早稲田
大学社会学会

篠田浩一郎

1977 『形象と文明—書くことの歴史—』白水社

ソントグ, S (近藤耕人 訳)

1992 (1979) 『写真論』晶文社